

クリスティアン・

平崎真弓 & ベザイデンホウト

[ヴァイオリン]

[フォルテピアノ]

デュオ・リサイタル

至高のオール・モーツァルト！ プログラム曲目解説を一足先に公開！

ピリオド、モダンの枠を超え、現在、モーツァルト演奏の第一人者として真っ先に名前があがるのはベザイデンホウトであろう。CD 会社の紹介文には“**モーツァルトの再来**”とあるが決して誇張ではない。絶妙なダイナミクス・コントロールとデリカシー、さらに装飾までもがモーツァルトを感じさせてくれるからだ。

片や、6 年前からモーツァルトの生地ザルツブルグのモーツァルトウム音楽大学バロック・ヴァイオリン科教授を務める平崎。手兵の**コンチェルト・ケルン**はもとより、**フライブルク・バロック・オーケストラ**、**ベルリン古楽アカデミーのコンサート・ミストレス**の重責も担うなど、今や欧州古楽界において確固たる地位を築くスペシャリストである。

モーツァルトが生きた時代の楽器を知り尽くした二人だからこそ、アマデウスの笑いの翳に隠された恥じらい、歓びと苦しみ、葛藤が、生の声として聴こえてくる。

第 1 楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェは、少し前に作曲されたピアノ・ソナタ第 7 番 ハ長調を想わせる快活な楽章である。生命力ある多彩な旋律線はモーツァルトならではのと言えよう。

第 2 楽章 アンダンテ・ソステヌート へ長調 三部形式。J. C. バッハの演奏会用アリア「甘きそよ風」が主題。ピアノがリードし、ヴァイオリンは伴奏形で進むが、中途からヴァイオリンの美しいメロディが登場。その後の展開は息が詰まるほどの儚さを感じさせる。

第 3 楽章 天衣無縫のアレグロ。浮揚し飛び廻るかのような自在さをもつロンド・フィナーレ。ここでも主題にクリスティアン・バッハの旋律が使われているのだが、モーツァルトの展開の筆致には舌を巻かざるを得ない。可憐な花々が咲き誇ったかのよう。粋な結び方も特筆したい。
⇒裏面へつづく

ヴァイオリンとフォルテピアノのためのソナタ 第 24 番 ハ長調 K.296

1778 年 (22 歳)、母親とともにパリ旅行への途中、マンハイムでゼラリウス家 (宮廷顧問官) から宿舍を提供してもらった感謝として、当家の 15 歳の娘テレゼ・ピエロンに献呈した作品。モーツァルトは彼女にピアノを教え、自らはヴァイオリンを奏でたことであろう。一気にあふれ出るような晴れ晴れとした曲想は、それまでの作品から明らかに開花したことを感じさせる充実感に満ちている。全体にピアノのウエイトが大きいですが、第 2、第 3 楽章ではヴァイオリンにも魅力的な旋律が与えられている。



▶ 2 人の動画を紹介！ (今回の演奏曲目とは異なります)

平崎真弓さんが
コンサート・ミスト
レスを務めるコン
チェルト・ケルン
の演奏



ベザイデンホウト
さんのソロ、モー
ツァルトに影響を
与えた C.P.E. バッ
ハによるロンド。



ヴァイオリンとフォルテピアノのためのソナタ 第35番 ト長調 K.379

1781年(25歳)4月、ウィーンでの第1作は友人のヴァイオリニスト、ブルネッティと共演するために書かれた。父レオポルトに宛てた手紙には「昨晚、ヴァイオリンパートを11時から12時までに作曲しました。ピアノパートは僕の頭の中にあります」とある。実際、公演にはヴァイオリン譜のみで臨んだことだろう。

冒頭、フォルテピアノは広大な大地、高い大空を想起させる。ヴァイオリンが重奏で入ってくるころは、その大空に、一羽の鷹か鷲が大きく翼を広げたままゆったりと旋回するかのよう。モーツァルトはなんと大きな音楽を描いたのか。しかし、音楽はその後、上空から徐々に地上の一転にフォーカスされる。天空から一個人の心中へと突き入ってくる衝撃のト短調が始まるのである。特にフォルテピアノの特性というべき響きの減衰が切迫感を煽り、モーツァルトのいたたまれない心象を浮かび上がらせる。

第1楽章 アダージョ 変則的ソナタ形式(2部構成)。ト長調の雄大な序奏を経て、ト短調のアレグロ主部へなだれ込んでゆく。

第2楽章 アンダンティーノ・カンタービレ。さらっとした中にも慈しみ深い主題と5つの変奏で構成。第1変奏はピアノ独奏。第2変奏は三連符が効果的なヴァイオリンがリードし、起伏の激しい第3変奏へと進む。第4変奏はト短調に転調。第5変奏は優しい語り口のピアノで始まり、ヴァイオリンは終始ピツィカートで並奏するが、ピアノは様々な表情を見せる。その後、アレグレットの主題となって戻ってくる。

「泉のほとりで」による6つの変奏曲ト短調 K.360

1781年、ウィーンに定住していた夏に作曲された。6月20日の父への手紙には「女性弟子のために変奏曲を書き上げねばなりません」とあるが、それはマリー・カロリーネ・ティエンヌ・ド・ルムベック伯爵夫人への作品と言われている。

主題は1778年、パリ滞在中に親しんだであろう1767年出版のアルパネーズのアリエッタ集からとられたもの。モーツァルトは原曲をト短調に移調。前作「羊飼いの娘セリーヌ」による12の変奏曲ト長調の対

照作品としての意図が見てとれる。

シチリアーノ風のリズムによる主題は憂鬱さが際立つ。6つの変奏によって思いもかけない深さへと変容されていく。ヴァイオリンが旋律をリードする部分では、作曲者特有の半音階下降が印象的。ドイツの音楽史家、H.アーベルトは「抑制された激しい情熱をもつ真にモーツァルト的なト短調作品」と称した。なお、「泉のほとりで」との表題は、モーツァルト自身が付けたものではなく、新全集のものであり、それ以前は「ああ、私は恋人をなくした」としての表題で知られていた。

ヴァイオリンとフォルテピアノのためのソナタ 第40番 変ロ長調 K.454

1784年(28歳)、イタリアのアントヴァ出身の女流ヴァイオリン奏者レジーナ・ストリナザッキ(当時20歳)がウィーンを訪問することで作曲された。モーツァルトはストリナザッキを高く評価、父への手紙に彼女が非常に豊かなセンスをもった奏者であることを記している。しかし、時間の余裕がなかったためピアノ譜はメモ程度、リハーサルもほぼなしのまま皇帝ヨーゼフ2世臨席のもとで初演したとされる。

ストリナザッキの技量を生かすためであったのだろう、ヴァイオリン・パートの充実が輝かしくスケールの大きな作品。それまでのソナタとは異なり、ピアノとほぼ互角に渡り合う構成となっている。

第1楽章は4分の4拍子、ソナタ形式。力強いラルゴの序奏で開始され、ヴァイオリンの息の長いフレーズとピアノの典雅さが広がりを感じさせる。主部アレグロは、明朗快活なヴァイオリンによる第1主題、流麗な第2、第3主題へと進み、提示部はユーモラスな鳥のさえずりを思わせる。

第2楽章 アンダンテ 変ホ長調、4分の3拍子、自由なソナタ形式。2つの楽器が穏やかに交替を重ねながら進められる。短調に転じてからの悲痛な情感、終結への歩みが美しい。

第3楽章 アレグレット 2分の2拍子は、ガヴオット風の主題と二つのエピソードをもつ典雅で生き生きとしたロンド・フィナーレ。ヴァイオリンとピアノの自在なやりとりが愉しい。K.296から6年を経たモーツァルトの声が聴こえてくる。



2023. **5.13** [土] 2:00pm 開演
A席 5,000円 / B席 4,000円 (全席指定・税込)

兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール

ご予約: 芸術文化センターチケットオフィス 0798-68-0255 [10:00am-5:00pm 月曜休※祝日の場合翌日] <http://www.gcenter-hyogo.jp>

主催: 兵庫県 兵庫県立芸術文化センター ※やむを得ない事情により出演者、曲目等が変更となる場合があります。未就学児童は入場できません。